

# 薬史レター

(薬史学会通信改題)



第 49 号

日本薬史学会

J S H P

2008 年 6 月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局  
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

## 2008(平成 20)年度日本薬史学会年会

### 研究発表演題の募集

日 時：平成 20 年 11 月 15 日(土) 9:00～

年 会 長：播磨 章一(近畿大学 薬学総合研究所)

会 場：近畿大学 11 月ホール小ホール

主 催：日本薬史学会

共 催：近畿大学 薬学総合研究所

協 賛：大阪府薬剤師会、大阪市薬剤師会、日本薬学会関西支部

研究発表：口頭発表(1 演題 20 分：発表・質疑応答)

申込方法：FAX または E-mail で下記の必要事項を記入し年会事務局へお送りください。

1. FAX の場合：「日本薬史学会年会 2008(平成 20)年会演題申込書」(様式 1)中の下記(1)、(2)および(3)の項目をご記入ください。

(1) 研究発表演題

(2) 研究者全員の氏名(発表者に○)と所属

(3) 連絡先：氏名・所属・住所・電話・FAX・E-mail(勤務先の場合、所属を明記ください)

2. E-mail の場合：添付形式にせず、メール本文に様式 1 の必要事項を記入し送信ください。

なお、発表者は発表申込時点で日本薬史学会会員に限ります。

発表演題申込の締切：平成 20 年 7 月 20 日(必着)

発表要旨提出の締切：平成 20 年 9 月 16 日(必着)

年会参加申込：FAX の場合には「日本薬史学会年会 2008(平成 20)年会参加申込書」(別紙 2)の項目をご記入のうえ、お送りください。また、E-mail の場合には添付形式にせず、メール本文に様式 2 の必要事項を記入し送信ください。

なお、事前参加につきましては、10 月 31 日をもちまして締め切らせていただき、以降の参加申込につきましては、年会当日の受付とさせていただきます。

年会事務局：連絡先 近畿大学 薬学総合研究所 担当 山下 多美子

〒577-8502 東大阪市小若江 3 丁目 4 番 1 号

電話：06-6721-2332(内線 5001) ダイヤルイン：06-6730-5880

FAX：06-6730-3577 E-mail：tamiko.yamashita@itp.kindai.ac.jp

会 費：①日本薬史学会年会；会員；¥3,000 非会員；¥5,000 学生；¥1,000

②近畿大学 カフェテリア “ノーベンバー” での懇親会

会員および非会員；¥5,000 学生；¥2,000

様式 1

## 日本薬史学会 2008(平成 20)年会 演題申込書

演題
----

発表者、共同研究者の氏名

氏名(フリガナ)	所属
発表者	

連絡先(勤務先の場合、所属を明記ください)

氏名	
所属	
住所 〒	
TEL	FAX
E-mail :	

参加申込書の送付先

日本薬史学会 2008(平成 20)年会事務局

〒577-8502 東大阪市小若江 3 丁目 4 番 1 号

近畿大学 薬学総合研究所 担当 山下 多美子

電話 : 代表 06-6721-2332(内線 5001)      ダイヤルイン : 06-6730-5880

FAX : 06-6730-3577

E-mail : tamiko.yamashita@itp.kindai.ac.jp

本申込書を FAX でお送りいただいても構いません。

様式 2

## 日本薬史学会 2008(平成 20)年会 参加申込書

フリガナ 氏 名	
所属	
住所 〒	
TEL	FAX
E-mail :	
参加費 (○で囲んでください)	
1. 日本薬史学会 2008(平成 20)年会	
会員	¥3,000-
非会員	¥5,000-
学生	¥1,000-
2. 近畿大学 カフェテリア “ノーベンバー” での懇親会	
会員および非会員	¥5,000-
学生	¥2,000-

演題申込書の送付先

日本薬史学会 2008(平成 20)年会事務局

〒577-8502 東大阪市小若江3丁目4番1号

近畿大学 薬学総合研究所 担当 山下 多美子

電話：代表 06-6721-2332(内線 5001)   ダイヤルイン：06-6730-5880

FAX：06-6730-3577

E-mail：tamiko.yamashita@itp.kindai.ac.jp

本申込書を FAX でお送りいただいても構いません。

## 日本薬史学会 2008(平成 20)年度 理事・評議員会、総会終わる

4月19日(土)、11時30分より学士会分館に於いて理事・評議員会が行われて、2007年度の事業報告、決算報告が説明された。決算についての監査結果も適正であることが報告された。

次いで2008年度の事業計画、予算案その他会則の一部改定、新役員人事についての議事説明が行われた。

14時15分よりの総会は東京大学大学院薬学研究科総合研究棟講堂で行われて、議題は総会に於いて賛成多数により総て承認された。

新名誉会員としては滝戸道夫、宮崎正夫氏が推薦され、推薦状が授与された。

これらの事項の詳細は近く発行される薬史学雑誌43巻1号に掲載される。

### 新名誉会員のプロフィール

滝戸 道夫 氏(日大名誉教授)

滝戸氏は本学会第二代木村雄四郎会長(在職期間 1971～1986)のブレインとして本学会の運営を実質的に支えてこられた。また薬用植物学、生薬学を専門とされたことから請われて日本植物園協会会長の重責をも果たされた。

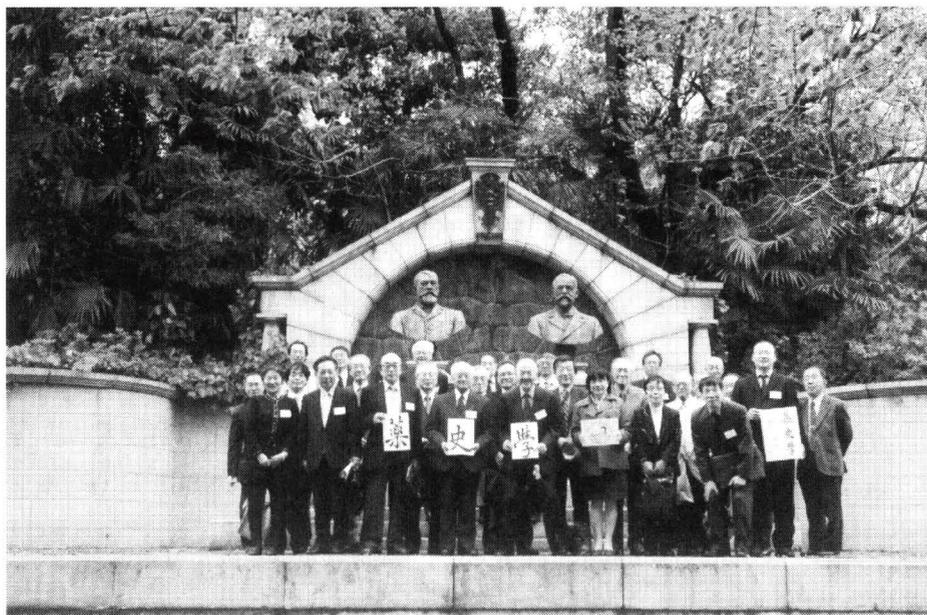
宮崎 正夫 氏

2006年に、初の日本薬史学会章を授与された。(薬史レター第43号8頁参照)

### 総会講演会(15時45分～17時30分)

1. 「クスリの体内宅配便 DDS：薬物作用の高性能化を目指して」

元日本薬学会会頭 東京理科大学教授 寺田 弘

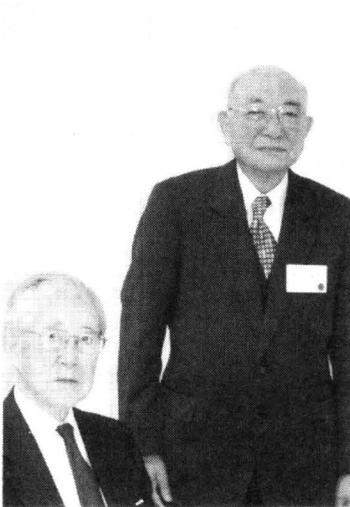


新理事・評議員(東大ベルツ・スクリバ像の前にて)

## 2. 「生命科学の進歩と医薬品研究開発」

日本製薬工業協会会長 青木 初夫

総会講演会終了後、東京大学山上会館で懇親会が行われた。



滝戸道夫名誉会員と  
柴田承二名誉会員



特別講演者 寺田 弘教授



特別講演者 青木 初夫博士

## 薬学会 128 年会の薬史学ポスター発表見聞記

今年の薬学会 128 年会の薬史学ポスター発表は、学会の中日の 3 月 27 日(水)の午後、横浜みなとみらい 21 の国際展示場で行われた。紺碧の快晴に恵まれ周辺の緑と七分咲きの桜に彩られた中で、薬学会年会は今までの最高 8,800 名が参加して開催された。



薬史学ポスター発表会場風景

展示会場の中央には医療機器と薬学図書の展示ブースが設置され、右側のパネルには 27 日午後は薬史学を含む薬学教育、左側のパネルには衛生薬学、環境科学、社会薬学などのポスター発表が行われた。

薬史学ポスター発表は午後 1～5 時の長時間であったため参加者の集まりに濃淡がみられたが、集まりが引くとポスターの前で発表者と長時間討議する人もあった。展示ポスターには、三沢らの「星一と宮様の交際」、「朝鮮薬学会と朝鮮薬学会雑誌」、山本らの「日向薬事始め」など視覚に配慮した発表。また白井の「牛病新書」の薬、塩原の「呉普本草」の構成、五位野の「漫画サザエさんに登場する薬学的事項」などの発表ポスターに工夫が見られたが、若手グループによる「理礼氏の薬物学書」の 8 報にわたる報告は、発表者の熱意に対し細かい字で埋められたポスターは見にくく一工夫が必要に思われた。ここには多数の薬剤の製法が紹介されているが、多くの医史学書にも紹介が少なく、これらの薬剤が明治初期の医療に使われたのかは検証が必要であろう。

ポスター発表の時間が長かったことから、発表者と参加者のコミュニケーションが得られ収穫の多い年会であったと思う。

(山川 浩司)

## ◆北海道支部だより

### 北海道薬学大会での支部活動状況

吉沢 逸雄(北海道支部 事務局)

第 55 回北海道薬学大会が、地元北海道の薬剤師会、病院薬剤師会、薬学会など 10 部門の参画のもと平成 20 年 5 月 10～11 日に開催されました。会場をこれまでの札幌市教育文化センターから新装間もない札幌コンベンションセンターに移しての新たな出発です。

当支部の活動は、初日に総会と特別講演を、二日目に会員の研究発表(ポスター)を行いました。その概要を報告します。

#### 総会

斎藤元護支部長の挨拶で開始、会則に従って支部長が議長となり、以下の審議に入る。

【報告事項】19 年度事業・会計報告の後、会計監査。

【審議事項】20～21 年度役員、支部会則の一部改正、20 年度事業計画、同予算案の提案と承認。更に、

来年 11 月、当支部が設立 5 周年を迎えるのを機に「支部設立 5 周年記念事業」を実施したい旨の提案があり、了承。早速、記念事業実行委員会を立ち上げ作業に入ること決定。なお、会員の出席者は 12 名(出席率：28%)。

#### 特別講演

北見工業大学国際交流センター教授の山岸喬先生に「シルクロードと薬物調査」なるご講演を賜った。

正倉院の種々薬帳(756 年)によれば、施薬を目的に保管されていた生薬(60 種)は少しずつ使用され時代と共に減少、現存は 39 種だけとのこと、消失生薬の原料である薬草は今もシルクロード沿線に自生していると想定し、それを確認するため、天山北路、天山南路、西域南路とタクラマカン砂漠を囲む地域を 10 年間に 6 度の調査で訪れ、マイカイ、オニク、マオウ、カンゾウなどの自生を確認。調査に伴

い、地域他民族の風俗、習慣など学術的にも貴重な報告であった。出席者には一般市民も含め 49 名。

#### 会員研究発表(ポスター)

昨年「温泉法の改正(平成 19 年)」を記念し、温泉研究における薬学の貢献をテーマとして、3 演題を発表しました。今年は、「改正温泉法施行」年ですので研究を継続。3 演題が集まり、加えて更に 2 演題の応募があり、以下の 5 演題になりました。なお、\*は当会会員です。

- ① ○根布谷ふみえ\*、小寺一\*、金沢勉\*、河野裕樹\*、斎藤元護\*：「北海道医薬品卸業の昭和後期から平成にかけての変遷」
- ② ○吉沢逸雄\*：「満州医科大学附属薬学専門部 その 1 設立から終焉まで」
- ③ ○高田昌彦\*、田中稔泰、吉田博文、吉沢逸雄\*：「薬学における温泉研究の歴史(IV)『日本鉱泉誌』に見る明治期わが国の温泉行政」
- ④ ○田中稔泰、吉田博文、吉沢逸雄\*、高田昌彦\*：「薬学における温泉研究の歴史(V)『日本鉱泉誌』に見る明治期わが国の温泉場の実情」
- ⑤ ○吉田博文、田中稔泰、八木直美、吉沢逸雄\*、高田昌彦\*：「薬学における温泉研究の歴史(VI)『日本鉱泉誌』に見る明治期北海道の温泉場の実情」

以上

## 古代中国に由来する民間伝承

### 呉越三題

1. 女護ヶ島
2. 河童・ガタロー
3. 湯坐部・ユエベ

杉山 茂(薬史学会)

#### 1. 女護ヶ島

この話の前提として、中国の呉越という国の話をしたい。B.C.5 世紀頃に興起し、4 世紀には歴史から消えた謎の海洋国である。呉王夫差と越王勾践の抗争の話は史上有名である。歴史的には両方とも漢族ではなく、苗族の流れであると言われている。呉越の民は漢族に追われて昔は山東省から北ベトナムまでの海岸線沿いに住んでいたが、だんだん南方に追いやられて、相当の人が海外に移住したとも言われている。その一つが日本であるとされている<sup>1),2)</sup>。この移住はさみだれ式に行われ、伊豆諸島殊に八丈島あたりには 5 世紀頃上陸したと言う人もいる。当時の伊豆諸島には縄文人が住み着き移住民との悶着が生じたと思われる。八丈島にも諸磯 b 類土器が発見されている。三宅島では上陸する移住民と土着人との間に争いがあったという伝説がある<sup>3)</sup>。

ここで、この頃日本が中国からどの様に見られていたかを述べたい。5 世紀頃書かれた[漢書・地理志下]に「呉の都・会稽の海外に東鯤の人あり、分かれて 20 余国になり、歳時を以て来たりて献見する」とある。少し以前に正史ではないが王充(27~97)の書いた[論衡]に「周の成王の時、越は常に雉を献じ、倭人は鴨を貢ず」とある。後に語るが伊豆諸島に生える「あしたば」は勿論八丈島でも食べられているが、この島では根の部分も食用にし昔は少し辛く香気あるところから酒に擦り入れて飲む。中国の薑黄(鬱金の一種)に似て、貢献に供したとも思える。また、范曄(398~445)は倭の条の後につけて、

倭と同じような位置、会稽の東方海上に夷州と澶州があると述べている。今は夷州は台湾とされており、澶州は種子島とする説があるが、著者は八丈島であると思う。

八丈島が呉越の移住民であるとの説の裏付けは多数あるが、数例挙げれば、本島の稲作耕作は相当古いと思われるが、その品種は伊豆半島は勿論ジャポニカ種であるが、本島のそれはインディカ種である。しかも田圃に敵がない。

[史記]の封禪書に越の勇之なる人の説に「越人の俗は鬼を信ず、その祠に皆鬼あらわれ数々効あり、昔越の東甌王が鬼を敬い百六十歳を寿ぐ、後世怠慢にして、故に衰耗す。即ち越巫に令して、越の祝祠を立てしむ。」中国の鬼は鬼神を言う。八丈島の郷社優婆夷神社には占部4人、祝3人、加社手7人、宮婦1人、巫女1人、神主代1人、禰宜5人、殊に占部の託宣は絶大で村民その意に従う。島人長寿にして80、90歳は珍しくなく100歳以上の人も多い。鬼神を敬うことは中国では珍しい。文明18年(1454)神奈川の奥山氏が島を支配する迄、祭政一致の土地であったと思われる。

なお呉越の人は織物にたけ呉服の語源にもなったが、本島も八丈絹を始め織物に長じ古くから島の貢献品となった。

呉越の装飾品に玉器があるが、八丈島の女性も練玉を連ねて腰間を飾る。

ところで本島は長く女護ヶ島とか女ごの嶋(お伽草子)或いは羅刹国(女ばかりの国)と言われて来たが、理由のないことではない。[伊豆七島志]によれば「女子13、4になれば自分の家に寝泊まりする者希にして、概ね夜は他家に泊まり翌朝帰る。従って各家夜中門戸をとずる事なく深夜人の出入りする事を怪しまず、それ故自ずから淫行多く私生児少なからず」とある。また「海島図記」には本島には美人が多く戦国時代には後北条氏は美女2人を本土に呼び寄せ、島にも予備美女2人を備え養ったと言う。

ちなみに家康の側室お万の方は、その出生が不明でその背後に後北条の謀臣で伊豆七島代官を勤めた板部岡紅雪や北条水軍の正木氏、蔭山氏、また政商江川氏が関与した形跡があり、八丈島でお万の方は「まんまる」その弟吉千代は「しちちょう」と呼ばれた推測があり後北条氏は滅亡時嫁に行かぬ養女2人を抱えてもおり、その兆候が多分にある。

呉越の記録にも越は美女を呉に定期的に贈与し、情報戦に利用したとある。越の美女西施や鄭旦は有名で、後世俳句の巨匠芭蕉が東北の景勝地で西施を合歡の花に譬えて、次の様に句作している。

象潟や雨に西施が合歡の花

以上は前書きで主文は、井原西鶴(1642~93)が書いた元禄期の好色本・浮世草子[好色一代男]に出てくる主人公世之介が日本で道楽しすぎて、好色丸に性に関する当時のあらゆる食物、薬物を載せて船出するのが主旨である<sup>4)</sup>。

世之介の用意した精力の付く食物には、泥鱈、牛蒡、薯蕷、卵。薬物としては地黄丸(六味と八味とある。どちらも補血強壯剤)。

六味地黄丸

出典：千金方、錢乙方

成分：熟地黄(酒に浸した物)、茯苓、大黄、杏仁、柴胡、当歸

効能：治腎精不足、虚火炎上。

八味地黄丸

出典：崔氏方

成分：熟地黄、乾山藥、山茱萸肉、白茯苓、牡丹皮、澤瀉、肉桂、附子

効能：治命火衰而腎虚或小便澀

女性用には女喜丹という膈挿入薬が用意された。平安期には用いられた説もあるが、中国からもたら

されたと言う説と国産と言う人がいる。日本では女悦丸と言っている。

#### 女悦丸

出典：中国乃至日本(好色旅枕 1695)

成分：人參、龍骨、細辛、明盤、丁子、牛膝、附子、烏賊の甲、山椒、麝香、柘榴皮、肉桂

上記薬品を粉末にして、水に飯を練った物か餅糊を少し混ぜ合わせて、むくろじの大きさに丸じて性交の前に膣に挿入して溶けるのを待つ。すると膣内が興奮して膨れ、多分バルトリン腺液の分泌を促進すると言う。

#### 山椒葉

出典：中国では花椒紅・蜀椒紅と呼ばれる。神農本草経

成分：山椒の芽を取る場合とそのまま使用

効能：久服軽身、耐老増年通神、好顔色

#### 牛膝丸

出典：沈氏尊生書方

成分：牛膝、川椒、附子、虎脛骨、密丸にす。

効能：益精

#### 牛膠飲

出典：證知準繩方

成分：牛皮の膠

効能：治癰疽、悪瘡

#### 水銀膏

成分：水銀、胡粉、松脂、黄連、猪脂

効能：古来梅毒瘡に用いる

#### 番椒実

成分：とうがらしを粉末にしたもの

効能：蛇毒傷、虱避け

#### 丁香油

成分：丁子の油

効能：蟹の解毒、治口臭、吃逆嘔吐、陰塞疝痛(陰部の疼痛)

世之介が他に持参したものは陰具や衣類、枕絵等でここでは取り上げない。

#### 参考文献

- 1) 増訂豆州志稿・伊豆七島志 長倉書店 伊豆の国市 1967
- 2) 杉本憲司：中国の古代都市文明、仏教大学鷹陵文化叢書、(株)思文閣、京都、2002
- 3) 小野真一：伊豆文化のルーツを探る、明文出版社、静岡、P.77 1987
- 4) 井原西鶴：好色一代男、岩波文庫、東京、P.232 2005

## 2. かつば(河童)・ガタロー

日本独自のむしろひょうきんな妖怪で主に西日本で河童と言われ、かわたろうとは関東地方の呼称である。近世初期から現れた。特長の頭髪は所謂おかつば頭で広く言えばザンギリ頭である。何しろ水に縁があり頭の上に水を貯める皿がある。

彼らは水に達者な動物で、時には子供や馬を川に引きずりこんだり悪さもするが、直ぐ人間に侘び証文を入れたり、悪戯の代償に薬の処方や教えたり、その家庭に常に魚を捕ってきて供給したりする。

かっぱの好物はキュウリだと言われているが、日本に渡来したのは南中国、東南アジア産とされている。昔は唐瓜とも言われた。渡来の時代は奈良時代を遡ると言われている。

今でも土曜丑の日(旧暦 6 月)には水神様のお祭りとして、その神獣のかっぱの為に川にキュウリを供えたり、川にそれを流したりする。古くはシロ瓜を供えたもので、シロ瓜は越瓜と呼ばれ、越の国から来たと言われた、しかし姿が似ているところから、キュウリに変わったものである<sup>1)</sup>。

ところで呉越の民は、水に親しみ黒歯しており、更に呉の民は背中に入れ墨をしていたと言う。両国とも水戦に長け、水軍の兵士は渦郎と呼ばれていた。なお越の軍隊は冬の水戦に備えて、ひび、あかぎれに効力のある膏葉を持参して戦いを有利に進めたとする。

渦郎は日本名をかたろうとしたと思うが、がたろう乃至かわたろうと言う場合もあったかと思える<sup>2)</sup>。

かっぱの伝える秘伝膏葉は全国的に残る。例えば

- 1) 伊豆の湯ヶ島町に伝わる相磯のかっぱ膏葉
- 2) 同様雲金村に伝わるかっぱ膏葉
- 3) 埼玉県熊谷に伝わるかっぱ膏葉
- 4) 筑後・柳川に伝わるかっぱ膏葉
- 5) 越後・加茂に伝わるかっぱ膏葉
- 6) 能登・淵端(ふちがた)のかっぱ膏葉
- 7) 浜松天竜川のかっぱ膏葉 etc<sup>3)</sup>

効能は打ち傷、すり傷、ひび、あかぎれ等々大同小異である。その内容、成分に関しては、秘密であるが、ひび、あかぎれに江戸時代に汎用された「潤肌膏」のそれを紹介しよう。

成分：香油、当帰、紫根、密蝨<sup>4)</sup>

参考文献

- 1) 小松和彦：かっぱ、平凡社大百科事典、平凡社、東京、3 巻、P.438
- 2) 塚本青史：呉越舷舷、(株)集英社、東京、2004
- 3) 宗田 一：日本の名薬、八坂書房、東京、P.97～、1981
- 4) 青木紐端：外科撮要、明和 5 年(1768)

### 3. 湯坐部・ユェベ

ユェとは、越の中国名である。[広辞苑]によると湯殿に仕える人、産児に湯に浸ける女を指す職業部であるとする。大田亮氏の[新編姓氏家系辞書]<sup>1)</sup>によると大湯坐と若湯坐とがあり、若湯坐部も、大湯坐部も山城、河内、摂津に分布し、垂仁、景行朝に仕えたとされる。結局湯坐とは初期の大和王朝の貴族の産児の乳母の役割を果たした部であると推測する。

乳母の大きな役割は、産児の健全な成長を担保することである。著者は、日本の初期の貴族は、江上氏の言う北方騎馬民族と言って間違いないと思考する。細かい歴史はその方面の学者に任せざるを得ない。騎馬民族の主な蛋白源は羊や牛、馬の乳汁である。推測するに縄文時代から初期王朝までの産児の死亡率が非常に高いことが言われている<sup>2)</sup>。

この一因は、産児に牛・馬の初乳を飲ませることにある。初乳には、グロブリンが多く含まれ、それが産児の腹中で固化して乳母が慣れていないと死に至る恐れがある。また日本の古代人の御飯は粥にしても固くて腹中で澱粉質が腐敗・発酵して死にいたる例が多かった。

越人は、肉や魚を柔らかくして細かくし野菜を入れ栄養豊にして食事を摂った。肉や乳を入れた粥は越人の得意の料理であった。彼らは粥のスープを酸性にして腐敗を防ぐ知恵を持っていた<sup>3)</sup>。

雲南省の文山には、苗(ミャオ族)の自治州があり、州都は開化鎮である。越人は苗族の流れと言うの

で、その料理を覗いてみた<sup>3)</sup>。

彼等が常に使用する酸湯は、野菜とお米の汁と水を混ぜて常温で1日発酵させた苗族独特の酸味のきいた出し汁である。蛋白やビタミンが豊富である。酸性で食物の腐敗を防ぎ身体に良い。

酸湯煮魚<sup>スワンタンチユイ</sup>は、酸湯で魚を煮た淡泊で食欲をそそるスープである。酸湯は、スープや調味料に広く使用される。御飯の他に豆やハトムギも炊き込んで食べる。

酸味がきいた漬物、肉を入れた粥は苗族共通の好物である。唐辛子もよく使う。

要するに日本に渡来した越人が大和朝廷の子供を育てたと言いたい。

#### 参考文献

- 1) 大田 亮編：新編姓氏家系辞書、秋田書店、東京、1974
- 2) 鬼頭 宏：人口から読む日本の歴史、講談社学術文庫、東京、P.74 2007
- 3) 御膳房編：雲南・食と文化、東方書店、東京、P.116 2005

#### 4. 纏め

呉・越はB.C.5世紀に興起して、4世紀に歴史の上から姿を消した謎の民族である。彼等は水辺に住み水練に強い民であり、殊に越は百越と言って中国海岸に沿って多くの国を作り、最近の研究によると100人位の人を乗せる大船を作って海外に雄飛したと言う。当然日本にも渡来したと思われ、その痕跡は多い。今回は呉・越の日本での活躍の一端を辿って一編を書いてみた。

## インド薬史学書の紹介

奥田 潤(名城大学薬学部名誉教授、本学会理事)

夏目 葉子(名城大学薬学部卒、在ニューデリー)

筆者の一人、奥田は30年前、アメリカ薬史学研究所(アメリカ・ウィスコンシン大学薬学部)の図書館へ調査に訪れた折、Parascandra 教授から G.P. Srivastava 著：History of Indian Pharmacy Vol.1 の恵を受けた。

また、われわれは、1昨年(2006)11月と今年(2008)年2月、インドの4大学薬学部、2病院、2診療所を訪問した。その折、Panjab 大学薬学部名誉教授 H. Singh 博士が現在のインド薬学史の第一人者であることを知り、同博士がインドの近代薬学史の著者で Vol.5 は今年の2月に出版されたばかりであることが分かった。そこで Panjab 大学薬学部へ Singh 博士を訪問し、同大学薬学部で「薬師如来像の薬壺」について講演後、同博士宅に招かれ、膨大な薬学史関係書、ジャーナル、資料の書庫(3室)を案内され、2時間程懇談した。

今回、日本で殆ど知られていないインドの薬学史について、故 Srivastava 教授、Singh 博士が書かれた2書を紹介することにした。

#### 1. Gorakh Prasad Srivastava (1916～1976)著

“History of Indian Pharmacy”, Vol.1, A5版 276頁(1954)

(Pindars Limited, Calcutta, India)

G.P. Srivastava は、Banaras Hindu University (BHU, ニューデリーの南東 600 km Varanas 市にある)薬学部の教授であったが 1976 年に他界し、Vol.1 は絶版となり、Vol.2 は出版されていない

(Vol.1の緒言はGeorge Urdang博士が書いている)。

その内容は神話時代、前 Charaka 時代(B.C.1000年前のベータ時代)、Charaka 時代(B.C.1000～500年)、後 Charaka 時代(仏教時代：B.C.600～A.D.500年)、中世時代(A.D.500～1600年)、初期の薬学、中世の薬学、インド薬学のギリシャ、アラブの薬学への寄与と関係に分けて書かれている貴重なインド薬学史書である。

—昨年11月われわれはBHU薬学部を訪ね、学部長室に飾ってあった同薬学部創設者M.L. Schroff教授(後述のH. Singh著Vol.4参照)、インド薬学史の父G.P. Srivastava教授(後述のH. Singh著Vol.5, p.216～246参照)の遺影を見つけ冥福を祈った。

## 2. Harkishan Singh 著

“History of Pharmacy in India and Related Aspects” (Vallabh Prakashan, Delhi, India)

Vol.1 Pharmacopoeias and Formularies (1994), B5, 159頁

Vol.2 Pharmaceutical Education (1997), B5, 204頁

Vol.3 Pharmacy Practice (2002), B5, 226頁

Vol.4 Mahadeva Lal Schroff and the Making of Modern Pharmacy (2005), B5, 216頁

Vol.5 Builders and Awareness, Creators of Modern Pharmacy (2008) B5, 362頁

Prof. H. Singhは前述のBHUでSrivastava教授に教えを受けた研究者でPanjab大学薬学部(ニューデリーの北250Km Chandigarh市にある)の名誉教授で現在80歳。上記の著書(Vol.1～5)は第2次世界大戦後インドが独立してからの薬学の歴史書で近代インド薬学史を知る上で不可欠の書物である。インド薬学史研究の第一人者であるH. Singh教授に、日本の薬史学雑誌に英語で論文の執筆をお願いしている。同教授の論文が読めるよう心から期待している。

なお、インドには薬史学会は存在していない。

筆者らの2回のインド薬学の調査で御配慮いただいたインド病院薬剤師会会長A.K. Adhikari氏、同病薬雑誌編集長Prof. B.D. Miglani、デリー薬学協会S.L. Nasa氏に感謝の意を表したい。

## 日仏薬学会・講演会報告

2月22日、恵比寿の日仏会館において、日仏薬学会の主催による2008年2月例会として、当会の山田光男理事が講師として招かれ、講演会が開催された。

演題は、「放射線研究に殉じた研究者、山田延男—Mme. Marie Curieの研究助手として(1923～25年)」と題して、山田理事の実父、山田延男氏がマリー・キュリーのラジウム研究所に、日本人としてはじめて留学し放射線研究に従事していたこと。また帰国後、まもなく発病して、31歳の若さで夭折されたこと。残っていた旅券から残留放射能が認められたことなど新しい知見を含めて発表された。

放射線の研究者の健康被害という面からも興味深い講演であった。

当時放射線研究をリードしていたキュリー研究所での業績の裏面に、全く未知であった放射線障害を身に受ける宿命を背負った研究者の生涯について、演者は上記の事実を控え目に話されたことは印象深かった。

## 柴田フォーラムの発足のお知らせ

本学会の学術集会は、これまで総会特別講演会(4月)と年会(11月)が定期的に開催されてきました。総会特別講演会は薬学研究、薬学教育、薬事行政、薬事情に関するトピックスについてその道の第一人者の講演を伺って会員の研修に役立つように運営してまいりました。

顧みますと1954年に創立された本学会は、日本薬史学会五十年史〔薬史学雑誌 39巻1号(2004)〕に記されているように、日本薬学会年会の薬史学部会での研究報告と集談会、くすり史跡めぐりの三本立ての活動で始まりました。当初は集談会を年に2~3回開催して、創立期の指導者により、薬学史、薬業史について多方面からの考察に基づき啓蒙的な講演がなされて、1995年からは秋季講演会と名称は変更されましたが総説的な講演会が行われてきました。

1999年に日本薬学会年会のマンモス化に対応して一般演題の全てがポスターによる発表に改まった機会に本学会会員の研究を口頭発表と討論による研鑽とするための集会としての日本薬史学会年会を企画して2001年の秋に発足させました。年会は順調に根付いてきて東京以外の大学所在地で開催しております。

この間、機能的に集談会の流れを受け継いできた秋季講演会は休止状態となって来ました。この度、企画委員会を中心となって、薬学史、薬業史全般に亘って、幅広い視野に立って、温故知新の気持ちで研修する会合としてのフォーラムを開催する準備を進めてまいりました。第一回は前学会長の柴田承二名誉会員に話題提供の講演をお願いして、ご快諾頂きましたのでご案内申し上げます。

### 記

日 時：平成20年8月5日(火) 14時より

場 所：昭和大学病院\*17階第二会議室

フォーラム：話題提供者は柴田承二先生

そ の 他：今後のフォーラム運営に就いて

懇 親 会：終了後簡単なビールパーティ(参加者の実費負担)

フォーラムに関する連絡先：塩原仁子理事(昭和大学薬学部)

(Tel. 03-3784-8063)

\*東急池上線・大井町線 旗の台駅下車東口5分

以 上

